

## ”しじま（静寂）”の芸術—劉善恆の写真表現

風の旅人 編集長 佐伯剛

いにしへの昔から、東洋においては、“しじま（静寂）”の芸術表現が深められていた。水墨画や俳句、そして楽曲においても、余韻の消え去ったあとの“しじま（静寂）”に音楽的な意味を見出す曲作りがなされていた。

近代化の過程で西欧文明を摂取し続けるうちに、日本社会は物や情報が溢れかえって賑やかになり、テレビ番組などにおいても、わずか数秒でも沈黙が訪れることは、白けた雰囲気であるとネガティブにとらえられ、常に意味のない笑い声が挟み込まれる。

沈黙や静けさを避けようとする気持ちは、もしかしたら、自分自身の現実に向き合うことから逃れたい心境の反映なのかもしれない。

しかし、そうしていながらも心の中に降り積もっていく世の中の汚れや穢れは、次第に心を圧迫し、様々なしがらみから自分を解き放して浄めたいという衝動も大きくなる。そんな時、人は、なぜか北の大地の真っ白な雪原に憧れ、旅に出ることがある。こうした心理は、どんなに文明化が進んでも変わらずに人間に備わっているものなのだろう。

劉善恆の写真表現は、北の国の単なる雪景色をカメラで写し取っているのではない。彼が創造した真っ白な時空の中は、あらゆる分別の濁りが掻き消えていくような、しんとした静けさに満たされている。

通りすがりの風景にカメラを向けるのではなく、自分の表現のために北海道に移り住み、求道的な姿勢で、ひたすら雪景色を撮り続けている彼は、近代文明の様々な現象に対して、もしかしたら批判的な考えを持っているかもしれない。しかし、そうした考えを説明的に訴えることは善悪二元論の対立概念の土俵に乗るだけであり、それがエスカレートすると、過激な原理主義による敵対行為となってしまう。

表現を行うにあたって、劉善恆の目は、外に向けられているのではなく、心の内側に向けられている。外の変化が未来につながっているのではなく、一人ひとりの心の内側に宿る芽が、未来を育てていくことを彼は知っている。だからこそ、彼の雪原風景は、地上のどこかに客観的に存在しているものだとしても、場所や時間の説明は不要で、誰もが心の内で共有している特別の何かであ

ると感じられるのだ。このことは、優れた芸術表現においては当たり前のことで、かつ大事なことであるが、写真で表現される風景において、この感覚が実現されているものは、意外と多くはない。

写真は、その技術の発明の時から、珍しいものを伝えるうえで大きな力を発揮してきた。そして、普遍性よりも特定化を重視する物の記録において、写真に勝るものはなかった。だから、写真を表現手段として用いる場合、そうした写真の強みをより発揮させる方向で行われた。

特定化できる珍しいものを伝えるという写真の力がもっとも発揮されるものは、宣伝広告であり、だから、写真は、消費社会の発展の立役者となった。

結果として、写真表現者の成功者の多くが広告写真においても重宝されることは、消費社会の必然だった。

そのようにして見栄えが良く宣伝効果の高い情報写真の氾濫によって、人間は、得体のしれない不安を膨らませていくことになる。その不安は、理由の定かでない喪失感、焦燥感、孤立感などが混ざり合ったものだが、その根本的な原因は、自分の生が根ざしている現場と、伝えられる情報のギャップにあるだろう。消費社会というのは、そのギャップを人々に感じさせ、そのギャップに対する不安や焦りを利用して利益を得るといった打算によって構築されている。そのギャップを、夢という言葉でカムフラージュしながら。

だから、この時代にカメラマンとして成功しようと思うならば、消費社会の先導者になる道を選んだ方が早い。

劉善恆の写真を初めて見た時から、この若者は、カメラをそうした処世的な手段として使うことに対して抵抗感をもっているらしいということはよくわかった。

彼は、カメラという近代的な道具を使っているが、その目は、俳人や南画の画家たちのように、どんなに時代の姿が変わろうとも変わることはない普遍に向けられていると感じられた。そして、過去に敬意を抱きながら、骨董趣味に陥るのではなく、現代から未来への架け橋になるようなエッセンスを抽出することを心がけること、そうした彼の思いは、彼にとって異国の地の雪景色と出会うことで具現化した。

劉善恆の作り出す世界は、見知らぬ場所なのに懐かしく、誰もいないのに不安でなく、何も無いのに満たされている。その"しじま(静寂)"の空間は、テレビ空間の沈黙のような白けた殺伐ではな

く、耳を澄ませれば、風の音とともに、過去から未来へと伝わっていく生類たちの様々な息遣いが滲み出てくるような情感豊かなものとなっている。その瞬間は、今ここではないどこかへと通じる一刻であり、過去も現在も未来も、白い風景の中で境界がなくなる。

人は誰でも、いつか必ず死んで身体は消えていくことになるけれど、その人が生きていた時の息遣いは、その人が関わった様々なものに気配として残っている。

人間に限らず、気配こそは、目に見える形よりも、その物の本質を伝えてくる。

劉善恆が写真で表しているものは、まさにその生の気配であり、生の気配を通じて、人は多くのものにつながり、決して孤絶していないということが実感できる。

寂しさのあまり、しじま(静寂)を忌避し、遠ざけてしまうと、そうした気配への親近感すらなくなってしまい、結果として、得体の知らない不安を増大させることになる。

”しじま(静寂)”の芸術は、しじま(静寂)の懷に抱かれることが孤独をつのらせるのではなく、むしろ逆に、我々の現実を超える大きなものにつながって存在の不安にさらされずにすむということを教えてくれる。劉善恆は、そうしたビジョンを具現化している数少ない写真表現者の一人である。